

## &lt;原 著&gt;

## 京都第一赤十字病院耳鼻咽喉科における中耳手術の現状

## (2年間の手術症例の検討から)

京都第一赤十字病院耳鼻咽喉科

村上匡孝、福島龍之、大西弘剛、高木伸夫

## Otosurgery in Kyoto 1st Red Cross Hospital

— The examination of the case with middle ear surgery during 2 years —

Masataka MURAKAMI, Tatsuyuki FUKUSHIMA, Hirotsune OHNISHI and Nobuo TAKAGI

The Department of Otolaryngology, Kyoto 1st Red Cross Hospital

Key words: Otosurgery Tympanoplasty Hearing level

## I. はじめに

当科には中耳手術の伝統があり、手術症例が多い<sup>1,2)</sup>。方針や手術手技には術者や時代による若干の差違があるが、術者や担当医の異動や交代があるにもかかわらず耳科手術の適応である紹介患者が多く、地域の病診連携が良く確立されている<sup>1)</sup>。同一術者(筆頭著者)による2年間の中耳手術症例を検討し、手術成績を報告するとともに、現況と治療方針をまとめる。

## II. 過去2年間の中耳手術症例

1994年7月から1996年7月までの2年間に、京都第一赤十字病院耳鼻咽喉科で施行した中耳手術(耳数)は253耳であった。このうち、術後最低1年以上臨床経過と聴力像を観察しえた249耳を今回の検討対象とした。

手術の内訳は、鼓室形成術224耳、鼓膜形成術15耳、アブミ骨手術3耳、経乳突の顔面神経減荷術3耳、内耳窓閉鎖術3耳であった。手術室で施行していても耳茸切除や鼓膜チューブ留置術のみの例や、外来診察室で行った日帰り鼓膜形成術は含めていない。

1. 疾患と年齢(図1): 全世代を通じ男女ほぼ同数であり、真珠腫が39.8%、慢性化膿性中耳炎

が38.2%、穿孔や異常がなく鼓膜が概ね正常な伝音性難聴(以下、鼓膜正常伝音難聴と記す)が2.8%であった。真珠腫では、上鼓室型中耳真珠腫が54耳(54.5%)、後上部型中耳真珠腫が24耳(24.2%)、広範囲に進展して起源が不明な真珠腫5耳、中耳真珠腫再発例が12耳(12.1%)、先天性真珠腫と外耳道真珠腫がそれぞれ2耳(2%)であった。全中耳手術に占める割合は、上鼓室型真珠腫21.7%、後上部型真珠腫9.6%、先天性真珠腫0.8%となる。その他の中耳炎は42耳であり、鼓室硬化症が16耳、癒着性中耳炎が6耳、中耳コレステリン肉芽腫が3耳、以前に受けたオープン法の手術の後遺症であるMastoid cavity problem<sup>3)</sup>(以下、マストイドプロブレムと記す)が7耳、急性乳突炎が4耳、外傷性鼓膜穿孔の遺残が2耳であった。鼓膜正常伝音難聴は7耳あり、耳硬化症が3耳、耳小骨奇形が3耳、耳小骨固着が1耳、外傷性耳小骨離断が1耳あり、耳小骨奇形(形成不全)1耳に先天性真珠腫が合併していた。その他(顔面神経麻痺や外リンパ瘻)が6耳あった。

患者の受診動機は、病院や診療所からの紹介(病診)が186耳と手術耳の74.7%を占めており、紹介のない新患が45耳(18%)、当科で経過を見ていた患者の再手術が18耳(7.2%)であった。地域的には、京都市内が105耳(56.5%)、京都府南部が58耳